

「吾輩は猫である」を成立させたもの

—— 作家漱石の出発をめぐる ——

遠 藤 祐

Some Constituents of the Novel, "I am a Cat"

— Chiefly on Sōseki's Debut as a Novelist —

TASUKU ENDŌ

「世の中を傍観する、^{インテレクチュアル}頭脳的な遊芸に似た所がある」¹⁾とは、長谷川如是閑の小説を評した漱石のことばだが、同様な評価が「吾輩は猫である」（以下「猫」と略称）についても、しばしば下されている。たとえば、高度の知性と教養に恵まれた人間の「知的遊戯」であり、要するに、学者漱石の余技を出ない、という風に。たしかに、「猫」においては、作者の自己が、周囲の人間達が、また人間一般が「傍観」され、^{インテレクチュアル}「頭脳的な」観察と批判の対象にされているといえる。けれども、果してそのことは「遊芸に似」ているだろうか。一方には「猫」を、「作家として、自己の生活を反省し、自己の周囲を観察し、時代の弱点を痛切に感じ、それに十分な表現を与え」た故に、「作家漱石を決定したもの」（伊藤整）²⁾とする見解もある。「猫」が漱石の内面に深くかわるものであったからこそ、知的な「傍観」も、また陽気な笑いや辛辣な諷刺も必要とされたのではないか。以下「猫」をめぐる、その疑問を検討してみたい。

※

「処女作追懐談」で漱石は次のように語っている。

「私はただ偶然そんなものを書いたといふだけで、別に当時の文壇に対してどうかうといふ考も何もなかった。たゞ書きたいから書き、作りたいから作ったままで、つまり言へば、私がああいふ時機に達して居たのである。」

「猫」の第1回が書かれたときの事情が説明されているのだが、ここに「偶然」といわれるのは「猫」と文壇を結びつける必然性がないという意味であって、漱石に「猫」をうむ必然の要求がなかったということにはならぬ。むしろ漱石一個としては、「書きたい」ことが内にあり、作品に「作りたい」という要求があって、それが「猫」に結晶したとみるべきではないか。「神経衰弱にして狂人なるが為め、「猫」を草し「漾虚集」³⁾を出し、また「鶉籠」⁴⁾を公けにするを得たり……」と記した漱石の心情を考察してみる必要があるだろう。

すでに漱石はロンドン留学中に、「文芸の翫賞は善かれ悪しかれ自分の持つてある舌でやるべき仕事」⁵⁾であるという自覚に立って、一切の「権威ある^{トランシヨナル}伝統的な批評」⁶⁾や「他の定めたる芸術的範疇」⁷⁾によらぬ、独自の「文学論」を組織することにおのれの生きがいのみだしていた。同時に、苦痛にみちた不快なものが現実の人生なのであり、しかもそのなかで「自己本位」の立場に立って生きなければならぬとも思っていた。その認識はたとえば「代助は、自己本来の活動を、

1) 『『額の男』を読む』。

2) 「初期の作品について」創芸社版全集第12巻所収。

3) 「倫敦塔」「カーライル博物館」「幻影の盾」「琴のそら音」「一夜」「薙露行」「趣味の遺伝」を

収録した短篇集。明治39.5大倉書店刊。

4) 「坊ちゃん」「草枕」「二百十日」を収録。明治40.1春陽堂刊。

5) 6) 7) 「鑑賞の統一と独立」。

自己本来の目的としていた。……自己の活動以外に一種の目的を立てて、活動するのは活動の墮落になる。従って自己全体の活動を挙げて、これを方便の具に使用するものは、自ら自己存在の目的を破壊したも同然である。」¹⁾ という風に後の作品に反映している。留學生活は多くの点で不愉快なものであったけれども、自分のための時間には恵まれていたし、わずらわしい係累からは自由であったから、漱石は、「自己本位」に生きて、「文学論」述作のための研究生活に専念することが可能であった。

ところが帰国してみると、事情はたいへん違っていた。数多くの書籍とノオトと「十年計画」による「文学論」の構想とをもって帰った漱石は、有金をほとんど一文ももたなかったし、彼を迎える妻子も着のみ着のままの有様であった。漱石は何よりも先に金の工面に奔走しなければならず、食うためには不本意でも「語学教師杯に追つかはれ」²⁾ なければならなかった。実生活は彼から「思索の暇も読書のひまも」³⁾ 奪ってしまう。「自己本来の活動」をさまたげられるほど苦しいことはあるまい。

漱石をいらだたせた事情はこれにつきぬ。「自己本位」をつきくずそうとするものに、身内や姻戚があった。漱石自身は自由であろうと欲しても、彼等の方が執拗につきまとして理非を無視した金銭上の要求を出す。それを処理するための心労が、また、研究への自己集中をさまたげる。しかも彼等は漱石の苦痛についてはまったく無感覚であった。漱石の「自己本位」は、いうまでもなく自己の内的要求の正しさを認めるといふたしかな理由のうえに成り立つ。しかもそれは、自己が不当に圧迫されたり、軽視されたりする社会の実状の体験をとおして、必要さを確認されたのである。

「自己本位」の要求は当然自己をおかそうとするものへの激しい反撥の感情を含んでいる。親類縁者達は、漱石の世俗への怒りを触発するなかだちとなった。

さらに漱石をつまづかせたのは、自己を生かすことを信条としながら、他人に対する怒りにかきみだされて、自己を失ってしまうという事実であった。この矛盾の発見が自身を罵ることになり、ひいてはまわりのものへの憎しみに輪をかけることにもなる。

このようにして内部に鬱積する怒りと苦痛とが漱石をときに狂的なふるまいに駆り立てる。その実状は「漱石の思い出」⁴⁾ にくわしいが、かっとなると前後の見さかいがつかなくなるのは、漱石の気質の一つであったようだ。自身もそれに気づいていたことは、若いころの文章「人生」⁵⁾ によって知られる。「因果の大法を蔑にし、自己の意志を離れ、卒然として起り、幕地に來るもの」が人生に存在し、「世俗之を名づけて狂氣」とする。この「狂氣」とらえられたとき「わが身には秩序なく、系統なく、思慮なく、分別なく、只一氣の盲動するに住するのみ」と「人生」は語っている。帰国後の漱石は、しばしば、一挙に起って精神の平衡をくつがえす非合理的な力に圧倒されたために、周囲から狂人と目されるにいたるのである。しかし、もちろん理性が完全に失われたわけではなかったから、漱石は世俗のいわゆる「狂氣」に侵略されがちな自己の危うさをはっきり意識していたのに違いない。「道草」の健三のように何とかして「此肝癢を乗り超え」ようと意図したはずである。まず現実の醜とおのれの苦さを詩美のうちに忘れようとする試みが始まった。明治36年から7年にかけて作られる英詩や俳諧がそれである。けれどもそれらは危機克服の積極的な力にはなりえなかったし、漱石の内面はそれらを純然たる趣味として興ずるだけの余裕をもってはいなかった。やはり自己の苦しみそのものを何らかの形で処理しなければ、道は開かなかつたのである。

1) 「それから」。

った。

2) 3) 明治32.3.15.付中根重一あて書簡より引用。

5) 明治29.10「竜南会雑誌」に発表。

4) 夏目鏡子述、松岡謙筆録。引用は角川文庫版によ

そのとき漱石は俳諧から学んだ一つの方法を自己をみるのに応用した。それは「おのれの感じ、其物を、おのが前に据ゑつけて、其感じから一步退いて有体に落ち付いて、他人らしくこれを検査する余地」¹⁾をつくるという方法である。いら立ったり、癩癪を発したりして我を忘れていた最中に、ふと冷静さをとりもどして自己を眺めることができたとき、そこに見えるのは異様に歪んだ滑稽な姿だけである。それに気づいた瞬間、人は、それまで自己を支配していた圧力の急速に減少するのを感じるに違いない。そのような事態を意識的にひきおこすのはもちろん容易なわざではないけれども、漱石は暗礁をのりこえるためにその方向にむかって努力したのである。しかも、「他人らしく之を検査」した結果を、一七字にでなく、もっと息の長い散文に表現する営みを始めたのである。当時親交のあった高浜虚子ら「ホトトギス」派の写生文が大きな刺激となったこともみのがせない。およそそのような経路をたどって、向かいの下宿屋の学生の話や水彩画の試み、新体詩制作のことなど、自己と身辺に関する写生的断片が書かれ、明治37年末の「猫」第1の成立にいたると考えられる。

※

写生文は、正岡子規が、俳諧の作法として唱えた写生の説を、散文の領域におしひろめたところに成立した。漱石がこれに強い関心を示していたことは、小説及び文章の問題をとりあげた談話筆記に明らかである。そこではおもに対象を如実に描き出す描写方法としての写生文が説かれているが、同時に、「大抵第三者の地位に立って、客観的に人物を観察」²⁾して写生するという態度への関心もあった。また、傍観的な立場から「世間人情の交渉を視るから大抵の場合には滑稽の分子を含んだ表現となって文章の上にはあらはれて来る」³⁾とその特性をとらえていたこともつけくわえたい。合理と非合理の相剋、というよりも、合理への志向を非合理的なものがおかす結果、自己がいかに滑稽な状態を呈するかを明瞭に示してわらうことを必要とする漱石によって、写生文による危機克服が求められたのは当然であった。それゆえ、「猫」第1は虚子の勧めによって、「ホトトギス」同人達の写生文批評の集まりである「やま会」において朗読さるべき文章として書かれたのである。

虚子の記すところによれば、「猫」第1が「やま会」で発表されたとき、会員一同は「兎に角変ってゐる」という点で「讃辭を呈」したという。⁴⁾ たしかに、「吾輩」と称する猫が登場して人間社会を観察し、その感想をものがたるという着想は、あまり類のないものであったに違いない。けれども、当時の漱石の内面にひきつけて考えてみれば、それは決してたんなる風変わりなおもいつきではなく、やはり、「一步退いて」おのれの姿を「他人らしく」眺めうる位置を確保しようとする意図からでたものとして受けとることができる。自己を描写の対象にする場合、眺める自己を一個の独立した存在として作中に設定すれば、作中人物は作者に向かって独自の存在であることを要求するという法則に従って、仕事は確実に、しかもやりやすくなると思われる。その意味で、猫は作者でありながら、しかも別個の存在として作者の全意識が現実の葛藤にまきこまれてしまうのを阻止する役割を果すといっている。

猫の出生に始まって、彼が英語教師苦沙弥の家についていくようになるまでの経過を叙したのち、「猫」第1は、猫の眼に映じた苦沙弥の変屈で我儘な、しかもむやみに学者ぶろうとする人間像とそのためひきおこされる日常生活の失策とを描きだす。写生的断片のひとつであった水彩画を試みる話がとりあげられ、それをめぐって博学をふりまわして人を煙にまくのを得意とする友人の美学者迷亭の登場となり、その「出鱈目」なデル・サルートの画論に苦沙弥はみごとにかつがれてしまう。「教師は厭だ」と不平をこぼしながらも毎日学校に行き、帰れば終日書齋にこもってたいへん

1) 「草枕」。
2) 「文学談」。

3) 「写生文」。
4) 「漱石氏と私」。

な勉強家のようにみせかける、「神経胃弱性」の人物、漱石によく似たところのある苦沙弥は、徹頭徹尾わらいものとして描かれるのである。「猫」第Ⅰが公表されると、漱石のまわりではモデルについての評判が立てられたようで、漱石は門下生の野間真綱にあてて「猫伝中の美学者は無論大塚の事ではない大塚は誰が見てもあんな人ぢゃない。……主人も僕とすれば僕他とすれば他どうでもなる。」¹⁾と書いている。大塚というのは漱石の学生時代からの友人で美学を専攻した大塚保治のことで、彼が迷亭のモデルではないと断わっているわけだが、苦沙弥が漱石自身であるという点については格別の否定はされていない。のみならず今の引用につづいて「兎に角自分のあらが一番かき易くて当り障りがなくてよいと思ふ。人が悪口を叩かぬ先に自分で悪口を叩いて置く方が洒落てるぢゃありませんか」と漱石は記しているのである。「猫」第Ⅰの自的がどこにあったかは明らかであろう。

漱石は、はじめ、「猫」を「一回だけで仕舞ふ積り」²⁾でいたが、雑誌に掲載されてみると好評であり、虚子あたりからさかんに続きを求められたので第Ⅱを書いた。³⁾おそらく「偶然」の試みが他からも認められたために、書くことへの自信が与えられたのに違いない。むしろ危機克服のための試みであったものが、それ自体一つの目的として追求される第一歩である。「猫」第Ⅱになると新しい人物が登場する。苦沙弥の教え子で音楽に興味をもつ理学士寒月と、寒月の友人で「文学美術が好き」な東風である。迷亭、寒月、東風は何れも学問、文学、芸術など人間の精神生活の所産に興味と理解をもち、「沙婆気」や「慾気」に骨がらみになった「俗骨共」を愚劣、醜悪と罵する点において、苦沙弥と同じ仲間である。彼等の談話は機智に富み、知的教養の高さを示し、その話柄は世俗を超越することを特色とする。けれども、猫の眼でつきはなしてみれば、皆所詮は憐れむべくわらうべき存在にすぎない。「要するに主人も寒月も迷亭も太平の逸民」で表面では澄ました風をしていても、「競争の念、勝たう勝たうの心」が内を支配して、「一步進めば彼等が平常罵倒して居る俗骨共と一つ穴の動物になる」というその自己矛盾が指摘されるのである。ただ第Ⅱでは、一方に鮭をとられて怒鳴ったり、大声で牛肉を注文する車屋の神さんや、かわいがっていた三毛猫が死ぬと、そのかわりに「教師の所の野良」が死ぬばよかったのにと話しあう二絃琴の師匠とその女中が描かれて、自己の所有に対する執着や誇示、あるいは自己にとらわれて他を不当に抹殺しようとする心理、すなわち現世におけるエゴイズムの諸形態にも筆がおよんでいる。そこに第Ⅲ以下につながる漱石の意識をみることはできるのではあるまいか。

「猫」第Ⅱが「首尾を整へた構造」をもっており、発表のとき第Ⅱとせず「続篇」と書いたところから、漱石は第Ⅱをも読みきりにするつもりだったといわれている。⁴⁾けれども、前掲野間あての手紙に「ほめられると続篇続々篇杯かくきになる」といい、同じく野間あてに「時間さへあれば僕も稀世の大文豪になるのだが」⁵⁾とか、「猫の材料も出来たからまたあとをかきたいが閑がないから……」⁶⁾などといっているのをみると、適当な材料さえあればしばらく書き続けてもいいぐらいの気持があったとも想像されるのである。文章に自己を表現するという営みを一つの目的と考え、しかも世俗のエゴイズムとの対決という当面の決定的な生の主題に触れた以上、他からのすすめをまつまでもなく、漱石自身のうちに表現の意慾は誕生したとみるべきではなかろうか。

※

1) 明治38.1.1付。

2) 「文学談」。

3) 「猫」は10回にわたって「ホトトギス」に掲載されたが、その年月は次のとおりである。

〔Ⅰ〕38.1、〔Ⅱ〕38.2、〔Ⅲ〕38.4、〔Ⅳ〕38.6、〔Ⅴ〕38.

7、〔Ⅵ〕38.9、〔Ⅶ、Ⅷ〕39.1、〔Ⅷ〕39.3、〔Ⅸ〕39.4、〔Ⅹ〕39.8。

4) 小宮豊隆「夏目漱石」

5) 明治38.1.19付。

6) 明治38.2.9付。

「漱石の思ひ出」の記述に従えば「傍で見るとペンをとって原稿紙に向へば、直ちに小説ができる」といった具合に張り切って「猫」の稿を進めた漱石は、明治38年の早春から夏にいたるおよそ半年の間に、第Ⅲから第Ⅵまでを書きあげている。そこには、寒月の「首縊りの力学」と題する演説を始めとして、寒月と金田令嬢との恋愛にからんで実業家金田夫妻と苦沙弥の衝突が描かれ（第Ⅲ）、苦沙弥とは旧知の、やはり実業家のはしくれである鈴木藤十郎が、金田の意を体して説得に現われ（第Ⅳ）、転じて、苦沙弥邸の盗難と「吾輩」のねずみとりの失敗が叙せられ（第Ⅴ）、寒月の博士論文の話から「霊の交換」が話題となって、迷亭の失恋談がとびだし、発展して女性論におよぶ（第Ⅵ）というぐあいに、誠に多彩な変化がみられる。そして最後に東風を加えた「広い東京にさへ余り例のない一騎当千の豪傑連」が一堂に会して、およそ俗事とは無縁な話をかわす。途中鈴木藤十郎の巧みな話術で苦沙弥が「軟化」しかかる場面もあるが、総体に金田や藤十郎の属する領域と、苦沙弥邸に集まる人物達の世界とは、截然と対照されている。第Ⅲの衝突の場はもちろん、苦沙弥の「軟化」の場面にしても、迷亭が出現して金田を「紙幣に眼鼻をつけた丈の人間」「活動紙幣」にすぎぬとこきおろし、学問智識の尊さをのべて、寒月の縁談に断固反対するし、猫は藤十郎の処世術の巧みさを「極楽主義」と皮肉っている。それだけ漱石の生の主題はあらわな形でとりだされてきているということができるのである。もちろん、自己をわらうことによって実生活の「安全弁」とするという性格が与えられていない訳ではない。エゴイズムを怒る苦沙弥は現世の不正や醜さとたたかう意志に結びつかず、たんに感情的な反撥を示す滑稽な存在をでない。彼は「何ぞと云ふと、むかつ腹をたててぶんぶんする男」にすぎず、所詮は、迷亭、寒月らとともに「吾輩の無聊を慰むるに足る」珍奇な人物とされるのである。

ともかくも、内部の鬱屈を「猫」にはきだして、自己本位とエゴイズムとの対決の問題を俎上にのせるだけに安定を回復した漱石なのだが、なおその安定感を非合理的なものの領略から守りぬく自信はえられなかったというべきであろうか。しかし、第Ⅲと第Ⅳの間で、漱石は「批評家の立場」と題する談話を発表し、一般論としてではあるけれど、「西洋ばかりが必ずしもえらいのではない。日本には日本固有の特色がある。その特色を発揮するのが何よりえらいのだ。同時に自己の特色を発揮するのがえらいのだ」と言明している。そういいえたこと自体安定回復の度を示す資料といえるが、それよりも、この言明をわがこととしていかさそうとすれば、当然自身の非合理的なものにつき当るはずである。それを危ぶんでわらいに韜晦するのみでは、「批評家の立場」は無責任な発言に終わってしまう。「自己本位」の実現を可能にする体制が確立されねばならぬのである。

ところで、「猫」第Ⅳに、猫が苦沙弥を評して、主人は極めて頑固な人間だが「去ればと云って冷酷不人情な文明の産物とは自から其撰を巽にして居る」というところがある。それによって猫は苦沙弥の感情にかられやすい一面を指摘する訳だが、考えてみると、「冷酷不人情な文明の産物」ということばの背後には、現実の社会に処していくには「冷酷不人情」であること、つまりいかなる事態にであっても、おのれの感情を動かさず、冷然として必要事を処理していくことが不可欠の条件なのだという認識がある。それが漱石を根強く支配していたことは、のちの第Ⅹでより詳しく説かれているので明らかであろう。やや先まわりをするけれども、そこに漱石は、「金田君及び金田夫人」のごとく現世において「成功」するためには、「冷淡」になることの必要を自覚せねばならぬ、前非を悔い、切実に「善に移」ろうとするような人間は、「成功」どころか、「遠からずして」「人間の居住地」から「放逐」されてしまうだろうと記している。

いうまでもなく漱石は、他者の犠牲において自己の物慾を満たそうとするエゴイズムのもつ「冷酷不人情」を皮肉っているのである。帰国後の漱石を苦しめた有力な原因はそれにほかならなかった。けれども現実がそのようなものとして存在し、自身がそこに生きねばならぬとすれば、まず自

己を冷酷さで武装する必要があると漱石は考えたのではなからうか。他人がどのような言動をとろうと、いささかもそのために感情をいらだたせず自己をおしていくこと、その態度が確立できれば、内部の非合理的ものの暴発に対する危惧もおのずから解消することになる。他人はどうなってもかまわぬという冷酷さに対決するために、無感動の冷酷さを自己に課していく。そうすれば彼我の実態も正確にとらえることができ、自己を傷つけずに相手を制することも可能である。この冷酷さは俳諧および写生文に暗示された自己対象化の方法とよく似ているけれども、わらいによる韜晦に結びつかず、現実自己をいかそうとする意志の支えとして要求される場所に、性格をことにする所以がある訳である。

「猫」第Ⅳを書いたときの漱石が、果して上の如く考えていたかどうかは問題であるとしても、明治38年の夏ごろになると、冷酷さへの志向は指摘できるように思われる。「以前の日本人は科学的でなかったから、文章に顕はれる物の観察が余程鈍かったのではあるまいか。で、平生心がけて世の中を、明瞭に見ると云ふことが文章家に必要ではあるまいか。」これは「猫」第Ⅵ直前の談話筆記「現時の小説及び文章に付て」の終りの一節であるが、人間社会を科学的に観察してその実態を明確にするためには、感情に足をすくわれぬことが必要なのはいうまでもない。また、第Ⅵの最後に次のようなところがある。迷亭、寒月、東風が苦沙弥邸に集まって、毒にも薬にもならぬ話をとりかわしていると、突然立ちあがった苦沙弥が書齋から「大和魂」と題した短文をとってきて、皆に読んで聞かせる。「大和魂、と叫んで日本人が肺病やみの様な咳をした。大和魂、と新聞屋が云ふ。大和魂、と掬摸が云ふ。大和魂は一躍して海を渡った」にはじまり、国民があげて「大和魂」と高唱するが、結局それは何だ、誰もその実体を知らぬ、「大和魂はそれ天狗の類か」と結ばれる一文は、意外なことに、それまで座興ににぎわっていた一座に冷やかな空気をふきこむ。いつもなら真先に一言あるべき迷亭が「不思議な事に」口をきかぬ。とうとうその日は話がはずまず解散になる——というのだが、何故苦沙弥の一文が饒舌な連中に沈黙を強いる結果になったのか、それはこの戯文が彼らの「太平楽」の底をゆすぶるものを含んでいたためではなからうか。大和魂にとりつかれて訳もわからずに興奮する国民の自己喪失の愚にふれるこの戯文に、作者は自身の鋭いとげを槍えつけているのではないか。迷亭をして容易に口をひらかせぬのは、そのことの暗示ではないか。おそらく第Ⅵ掉尾の一条は、漱石の冷酷に実態をみつめ、真相をえぐることへの関心からうまれたものなのであろう。

内的機構がそのように変化したとき、漱石のわらいもまたその性格を変えねばならぬ。いいかえれば「猫」がわらいによる自己解放から辛辣な諷刺の作へと転ずる必然性がそこにある。ここで諷刺に関する漱石のことばをきくことは無駄ないとなみではあるまい。

「彼（*スキフトのこと）は理非の弁別に敏く、世の中の腐敗を鋭敏に感ずる人である。病的に人間を嫌忌したという名を博したに係らず、親切な人である。正義の人である、見識を持った人である。見識が無ければ諷刺は書けない。妄りに悪口を吐いたり、皮肉な雑言を弄することは誰にでも出来るが、真に諷刺とも云ふべきものは、正しき道理の存する所に陣取って、一隻の批評眼を具して世間を見渡す人でなければ出来ないことである。」

「文学評論」¹⁾の第4編「スキフトと厭世文学」の1節である。これは、スキフトの諷刺を論じながら、おのずから「猫」後半の性格を適切に解説するものといってよい。第Ⅵにいたる過程において、苦沙弥らの世俗に対してとった行動は「妄りに悪口を吐いたり、皮肉な雑言を弄したりすること」にほかならなかった。猫もときに「見識」を示しつつ、他方では雑煮踊りやねずみとりの失

1) 明治38.9より39.3にいたる東大における講義、原題は「十八世紀英文学」。

態を演じさせられていた。要するに滑稽にわれを忘れさす要素は豊かであったけれど、「一隻の批評眼を具して世間を見渡す人」の姿は、まだ作の表面に濃く表われてはいなかったといえる。しかし、漱石が、スキフトに似て「世の腐敗を鋭敏に感じ」ながら、しかもそれに背を向けてしまえぬ人間であり、冷酷さを武器として現実を鋭く凝視していこうとするかぎり、「猫」による辛辣な諷刺の展開は作家として当然のいとなみであった、といわねばならない。

※

おそらく明治38年の8月中に「猫」第Ⅶを書きおえた漱石は、しばらく「猫」の執筆から離れる。その間10月には既成の分が上巻として刊行され、12月になって第Ⅶ、第Ⅷが一挙に書きあげられた。上巻自序に「此書は趣向もなく、構造もなく、尾頭の心元なき海鼠の様な文章であるから、たとひ此一巻で消えてなくなった所で一向差し支へはない。また実際消えてなくなるかも知れん。しかし将来忙中に閑を偷んで硯の塵を吹く機会があれば再び稿を続ぐ積である」と記されているのを見ると、漱石には少くも当分は続編に手をつける用意のなかったことがわかる。「猫」におけるこの空白は何を意味するか。それは、冷酷さへの志向の強化にともなって、滑稽から諷刺に身をおくための準備期間であったと思われる。

「猫」の執筆が再開される直接のきっかけは、やはり漱石の感情のいらだちにあるようだ。第Ⅶ第Ⅷに前後する断片群をみると、たとえば「民の声が天の声ならば天の声は愚の声なり」にはじまる断片¹⁾は、俗衆の庸劣を罵って、彼らの「喧嘩し、紛擾し、小智小術を講じて一秒、一分、乃至一刻の計をめぐらして得々たる如き者は悉く蟻群の如く微弱なり」といい、²⁾もまた世俗の「醜陋下劣」を指弾している。そこには「裏の中学生が騒いで乱暴する」³⁾などの事実があった。第Ⅷはこの事件をあつかったものだが、ともかく世の中に対する漱石の癩はふたたびかぶるようになった。そのときに「猫」が書きはじめられた訳である。とすると、それは、第Ⅰの場合と同じく、感情の爆発をふせぐ「安全弁」という性格を一面にもっていたことになる。けれども、出来あがったものには、第Ⅰとは質的にことなるところが多分にあることは否定できぬ。

運動してひと汗かいた猫が、さっぱりする方法はないかと思案したあげく、ふと思いついて銭湯を探検にでかける、というのが第Ⅶである。銭湯の光景を眼の前にしながら、猫は衣服哲学を展開する。「人間は全く服装で持ってる」という前提に出発し、西洋婦人の胸や肩をあらわす「礼服」を難じたのち、日本にもそれをまねるものがあると指摘して、猫は次のようにのべる。

「西洋人は強いから無理でも馬鹿気て居ても真似なければ遣り切れないのだろう。長いものには捲かれろ、強いものには折れろ、重いものには圧されろと、さうれる尽しでは気が利かんではないか。気が利かんでも仕方がないと云ふなら勘弁するが、余り日本人をえらい者と思っではいけない。」

すべてが「れろ尽し」で、西洋に対して受身であり、自己の判断、評価を放棄する、「自己本位」とはおおよそ矛盾した傾向への批判、「余りえらい者と思っではいけない」という思いあがりへの警告、作者のいいたいのはそこである。しかも一事が万事で問題は服装のみにとどまらぬ。「学問と雖も」文芸といえども「其通りだ」と漱石はいいたいのである。衣服哲学はまだ続く。衣服というものが今日ようになったのは、元来裸で暮らしていた人間のうちに、少しでも人と違った風をして自己の優越性を誇示しようとするものがでたからだ。衣服の変遷は偶然の作用ではない。「皆勝ちたい勝ちたいの勇猛心の凝って様々の新形となったもので、おれは手前ぢゃないぞと振れてあるく代りに被って居るのである。して見るとこの心理からして一大発見が出来る。それは外でもない。自然は真空を忌む如く、人間は平等を嫌ふといふ事だ。」人間には、抜くべからざる競争心、

1) 明治38.11.26付高浜虚子あて書簡。

少しでも他人を圧して自己を拡大しようとの念があると指摘して、叙述は銭湯の実景に移るのだが、ここにも作者の真意が表明されている。当代文明の個人的傾向ないしはエゴイズムの問題への注視がある。

このような文明批評は前半にははっきりとは表われなかった特徴である。しかも冒頭にそれが提示されていることに注目したい。「自分の悪口を叩いて置く」第Ⅰとの違いが明瞭になると思うからである。

第Ⅷには「落雲館」と称する私立の中学校の生徒と苦沙弥の「戦争」の模様と彼の「逆上」ぶりが描かれる。「逆上」とは、血液が頭にあがって「のぼせ」る状態であり、「気違の異名」だと説明される。すなわち、それはしばしば漱石をおびやかしてきた世俗にいわゆる「狂気」、理非を絶した「一気の盲動」にほかならぬ。ところで、問題の「戦争」を描きだすに当って、猫はその方法と意義について次のように数言をついやす。

「逆上の説明は此位で充分だろうと思ふから、これより愈々事件に取りかかる。然し凡ての大事事件の前には必ず小事件が起るものだ。大事事件のみを述べて、小事件を逸するのは、古来から歴史家の常に陥る弊齎である。主人の逆上も小事件に逢ふ度に一層劇甚を加へて、遂に大事事件を引き起したのであるからして、幾分かその発達を順序立てて述べないと主人が如何に逆上して居るか分りにくい。分りにくい主人の逆上は空名に帰して、世間からはよもやそれ程でもなからうと見くびられるかも知れない。折角逆上しても人から天晴な逆上と謡はれなくては張り合がないだらう。是から述べる事件は大小に係らず主人にとって名誉な者ではない。事件その物が不名誉であるならば責めて逆上なりとも、正銘の逆上であって、決して人に劣るものではないと云ふ事を明かにして置きたい。主人は他に対して別に是と言つて誇るに足る性質を有して居らん。逆上でも自慢しなくてはほかに骨を折って書き立ててやる種がない。」

ここには徹底して苦沙弥の「逆上」ぶりをつこうとする作者の構えがある。ということは、漱石が、自己の内のもっとも険呑なものをいささかもたじろがずにみつめようとするほど、冷酷になりえている証左ではないか。あるいは狂うほどに熱しながら、なおその「逆上」ぶりをうかがう冷たい眼がうしろにあるといった方が適當かもしれない。その眼はたとえれば鋭いメスであり、一度それを手にした漱石は、もはやおそれずに自身の患部を縦横にきり開くことができるのである。従つて書きはじめのころと違って、「冥頑不靈で押し通す了見だと危ない。主人の尤も貴重する命があぶない」と事態のなりゆきを診断できる訳であり、診断がつけば、危険を除くための然るべき処置が用意される。その処置は第Ⅷの終りに次のように要約される。

「鈴木藤さんは金と衆に従へど主人に教へたのである。甘木先生は催眠術で神経を沈めろと助言したのである。最後の珍客は消極的の修養で安心を得ると説法したのである。主人がいつれを択ぶかは主人の随意である。只此儘では通されないに極って居る。」

しかし、「いつれを択ぶかは主人の随意」とつきはなされた苦沙弥は、漱石と同じようにいずれをもえらばなかつたのである。

冷酷な観察と批評の方法を身につけたことで、作家としての漱石の像がかなり鮮明になるという事は、「猫」と並行していた初期短編の試みが第Ⅶ・第Ⅷにひきつづく「趣味の遺伝」で終止符をうつという事情にも関連する。「猫」第Ⅰと同時に書かれた「倫敦塔」「カーライル博物館」以下「漾虚集」に収められた7編は、現実のわれを空想のうちに見失うとか、あるいは「霊の交換」とかいう浪漫的な主題の展開であった。散文によるとはいえ、それらを成立させたのは、現実を眼をとじて夢の世界に生きようとする漱石の詩情であった。けれども冷酷さへの徹底は、それを小説の領域からおしだして、ふたたび「風流韻事」たる漢詩と俳諧に限ってしまったのである。(もつ

とも「猫」完結ののちに、「出世間的」な詩美に身を托す人物を描いた「草枕」があるが、これは詩的感動の流露した作とはいいがたい)

※

第Ⅷで、「逆上」の頂点においあげられたあげく三枚の処方箋を示された苦沙弥は、実は、「珍客」八木独仙の「消極的の修養」という説——現実の不正や醜悪との対決を断念して、自分一個の安心立命をうる工夫をすること——に少なからず心をひかれる（それはまた漱石の弱い一面の投影でもある）。けれども迷亭の独仙に対する毒舌にあうと、苦沙弥はたちまち動揺してしまう。のみならず彼が大いに「感服」させられた未知の人物からの手紙は、気狂の手になったものだというこゝとも、迷亭の話で明らかにされる。ここにいたってさすがに頑迷な苦沙弥もおのれについて考えこまざるをえなくなる。「気狂の説に感服する以上は……自分も亦気狂に縁の近い者であるだらう」と検討していくと、近ごろの「脳的作用」も「言辞」もたしかに常軌を逸しているとわかって、苦沙弥の心配は深まるのだが、次に方法をかえて正常と見える周囲の人間はどうかと考えてみる。すると迷亭も寒月も、あるいは金田夫妻も皆おかしいところのあるのに気づく、そこで以下の推理がひきだされてくる。

「ことによると社会はみんな気狂の寄り合いかも知れない。……其中で多少理窟がわかって、分別のある奴は却って邪魔になるから、瘋癲院といふものを作って、ここへ押し込めて出られない様にするのではないかしらん。すると瘋癲院に幽閉されて居るものは普通の人で、院外にあばれて居るものは却って気狂である。気狂も孤立して居る間はどこまでも気狂にされて仕舞ふが、団体となつて勢が出ると、健全の人間になつて仕舞ふのかも知れない。」

第Ⅷから第Ⅸにかけての苦沙弥は、いわば、ぎりぎりの状況に立たされた結果、自分自身でひとつの社会批判にまで到達するという風に描かれている。つまり漱石自身のたどった経路がそのまま苦沙弥の動きに表現されているのであって、このとき漱石と苦沙弥との距離は、従前にくらべてぐっと短縮されるのである。

第Ⅸにおける苦沙弥の、本当は自己が正しく社会が狂っているのだという推理は、「自己本位」のたたかいを可能にするために冷酷になろうとする漱石のえた帰結にはかならない。第Ⅸを書く漱石は、また「僕の旋毛は直き事砥の如し。世の中が曲って居るのである。」¹⁾と森田草平に書きおけている。徹底した比較検討をべてなお自己の正当さが信じられたときに、漱石は作家としてエゴイズムのたたかいを行動に移さねばならぬ。そこに第Ⅹと並行して、不正な人間を「もし本当にあやまらせる気なら、本当に後悔する迄叩きつけなくてはいけない」という考えを実践する「坊ちゃん」の成立する所以がある。

同時に、「天下に己れ以外のものを信頼するより果敢なきはあらず。しかも己れ程頼みにならぬものはない。どうするのがよいか。」²⁾という問題に対する解答として、「猫」のごとき冷酷に真相をえぐる小説の必要性も、いっそう強く認められていく。いま引いた森田あての手紙に「猫は世の中があきた杯といふ事はない。二、三の気短かな連中がそんな事を云ひたがるのだ。」とか「猫をかくのは立派な考だと思つてる。」ということばがあり、「猫」第Ⅹを書きおえたあと、畔柳芥舟にあてて「あれは総体が諷刺に候現代にあんな諷刺は尤も適切と存じ猫中に収め候」³⁾と記されているのは、そのことをものがたる。漱石はそのような意識にもとづいて、第Ⅹに、社会における虚偽と不正と、他者への冷淡、自己の物慾への執着をあげて「こんなごろつき手に比べると主人杯は遙かに上等な人間」だといひ、第Ⅹにいたって、苦沙弥およびそのグループの口を通じて、20世

1) 明治39.2.15付。

3) 明治39.8.7付。

2) 明治39.2.13付森田草平あて書簡。

紀文明の本質をさまざまな角度から諷刺させるのである。そこに漱石は、自身の「当世人の探偵的傾向」、自意識と神経衰弱の問題、「人間は只眼前の習慣に迷はされて、根本の原理を忘れるものだ」という見解を思うままに吐きつくしたのであって、その意慾が強すぎたために、寺田寅彦から「終りの方の文明の議論が人によって調子が変わってゐない」¹⁾と批評されることにもなったのである。

※

以上の分析をとおして、私は「猫」がたんなる「頭腦的な遊芸」ではないことを確認する。とともに、「猫」の成立をめぐる、真相の究明による現実批判と自己の生の理想実現とが漱石にとって問題であったことを、ここにくりかえしたい。それらは浪漫的な世界への逃避の性向とからまりつつ以後の漱石文学を形成していくものだから。

1) 明治39.8.28付 小宮豊隆あて書簡に漱石が「猫十一」を非難せるもの二人ばかりありたり。その一人の
曰く」として、説明している。